中国文学論集第二十号抜刷
平成三年十二月発行

# 『還魂記』における杜詩の受容

根ヶ山　徹

# 『還魂記』における杜詩の受容

根ヶ山　徹

## 一

湯顕祖（一五五〇～一六一六）の『還魂記』は、深窓の令嬢杜麗娘と書生柳夢梅との生死を越えた情を描き、夢と現実とを交錯させた巧妙な構成をとっていることから、読者観客を魅了して極めて高い評価を受けた作品である。作者湯顕祖は古典の教養を持つ読書人であるがゆえに、作品中には文飾に富んだ歌辞が用いられ、主人公も市井の名も無き庶民ではなく、知名の才子佳人が登場する。すなわち、柳宗元の後裔である柳夢梅と、杜甫の後裔である杜宝、杜麗娘父娘とがそれである。ために作品中には彼らの祖先に擬定される柳宗元、杜甫の詩が用いられているけれども、杜詩の援用は柳詩のそれを遙かに上回る。もとより柳宗元は古文家として、杜甫は詩人として後世にその文学が伝えられてきたため、杜詩が質、量ともに柳詩に勝っていることは歴然とした事実である。しかしながら、同じように主人公の祖先として擬定されながら杜詩の方が数多く用いられているのは、単にこうした旧来の評価に基づくものではなく、湯顕祖の詩文における主張に関連しているのではないか。

『還魂記』の脱稿は、万暦二六年（一五九八）、湯顕祖が南京礼部祠祭司主事の職から広東雷州府徐聞県典史への流謫、浙江処州府遂昌知県への量移を経て、故郷の江西撫州府臨川県へ閑居した年のことである。湯顕祖の降調は、万暦帝の聖明を障蔽し、私門を跋扈させている輔臣、科臣の除免を求めた上疏が、逆の結果を招来してのものであった。[1] そのためこれと同じ時期に構想、執筆された『還魂記』に湯顕祖の当時の心情が如実に反映されている

ことは夙に別稿において触れたごとくである。[2] とりわけ自らの徐聞流謫を柳宗元の嶺南流謫に比擬し、その後裔に擬定した柳夢梅を自らの理想像として形象化して、苦境から脱して栄達するように描いているのは顕著な事例である。これに対して杜宝、杜麗娘父娘には柳夢梅のごとき附託は見出せない。さすれば杜詩、柳詩援用の多寡は、主人公の作品中における役割の相違にも関連するのではないか。

そこで本稿では、如上の作者の文学上の好尚、及び執筆当時の境遇を考慮に入れながら、『還魂記』における多数の杜詩の援用が何を意味しているのか、また逆に何ゆえ柳詩の援用が極めて少ないのかについて、これが湯顕祖のいかなる意図に基づくものであるかを明らかにすべく考察を進めてゆくものとする。

## 二

『還魂記』の下場詩は全て集句詩によって構成されている。このように南戯の下場詩に集句詩が用いられていることについて、例えば王驥徳に次のごとき論評がある。

落詩は亦た惟だ『琵琶』のみ体を得たり。毎折先づ古語二句を定下し、却って二語を其の前に湊むるは、惟だ場下の人の暁り易きのみならず、亦た優人をして記し易からしむ。『玉玦』詩語に易へて之れを為りてより、是に於て争ひて文に趨る。邇(ちか)ごろ唐句を集めて以て新奇を逞しうする者有り、喃喃として何の語を作すかを知らざるなり。

（『曲律』「論落詩」）

南戯における下場詩は『琵琶記』のみ体裁が整っており、奇を衒って集唐詩を用いた下場詩が体を做していないことを難じているのである。また後に『還魂記』に刪訂を施した臧懋循は、

凡そ戯の落場詩に宜しく成語を用ふべきは、俚耳に諧はしむる為なり。臨川の往往にして唐句を集むるは、殊に趣に乏し。故に改竄すること多しと為す。

（『還魂記』第一齣「言懐」眉批）[3]

と言い、湯顕祖の原作の集唐詩による下場詩が興趣を欠くとして全てを改めている。

後人の評価はともあれ、『還魂記』には下場詩五四首だけではなく、集唐詩十五首が作品中に織り込まれており、

合わせて六九首の集句詩が収められている。[4] そこで、この集句詩について原作者別に詩句の使用頻度を見ると、主人公の祖先杜甫の詩句を用いたものが十四首あり作品中では最も多い。一方、もう一人の主人公の祖先である柳宗元の詩句を用いたものは僅かに三首しか用いられていない。勿論、集句詩は作品のそれぞれの場面に相応するように詠まれてはいるものの、これを唱う登場人物と作品の内容との間に必ずしも直截の関係を見出すことはできない。『還魂記』中の集句詩については別稿において論ずるものとしたいが、作品中で同じように主人公の祖先に擬定されていながら、杜詩の援用が格段に多いことは留意する必要があろう。

一方、『還魂記』中に典拠として用いられた詩句について見ると、やはり杜詩の援用が極めて多い。これは前述のとおり杜甫の後裔が主人公に擬定されていること、そして杜詩と柳詩の質と量の差にもよるであろうが、同じく主人公の祖先とされる柳宗元の詩が典拠としては全く用いられていないことは注目に値しよう。因に湯顕祖の作品で実在の人物李益を主人公として登場させる『紫釵記』では、李益の詩句が用いられているのは下場詩（第二六齣「隴上題詩」、第三一齣「吹臺避暑」）か、あるいは李益が題詩する場面（第三四齣「邊愁寫意」、第三九齣「淚燭裁詩」）においてのみである。こうしたことからも『還魂記』における杜詩の援用は極めて特徴的なことと言わねばならない。そこで以下に『還魂記』のどのような場面の、誰の白（せりふ）、もしくは唱において杜詩が典拠として用いられているかを、『還魂記』、杜詩の順に掲げることにする。[5] 尚、杜詩の引用は全て仇兆鰲の『杜詩詳註』からとし、原則として該当する詩句を含む二句にとどめ、援用がそれ以上にわたる場合のみ四句を引用した。

①第三齣「訓女」【前腔（玉山頽）】（杜宝）

吾家杜甫、爲漂零老愧妻孥。（我が家は杜甫の末裔、漂泊のすえに年老いて、妻にも恥ずかしき思い。）

何日干戈盡　何れの日か干戈尽きん
飄飄愧老妻　飄飄　老妻に愧づ

「自閬州領妻子却赴蜀山行三首」詩、其二（『杜詩詳註』巻十三）

杜詩は広徳二年（七六四）、妻とともに戦乱を避けて閬州から蜀へ赴いた時の作である。『還魂記』ではこの詩に借りて杜宝が高位高官に陞れず妻に苦難を強いていることを唱っている。

②第三齣「訓女」【前腔（玉山頽）】（杜宝）

［白］夫人、我比子美公公更可憐也。［唱］他還有念老夫詩句男兒。（奥や、私は子美公よりもっと哀れじゃよ。彼には尚、父の詩を詠む嗣子あり。）

驥子好男兒　驥子は好男児なり
前年學語時　前年　語を学びし時
問知人客姓　問知す人客の姓
誦得老夫詩　誦し得たり老夫の詩

「遣興」詩（『杜詩詳註』巻四）

③第三齣「訓女」【前腔（玉山頽）】（杜宝）

俺則有學母氏畫眉嬌女。（我には母をまねびて眉を画く嬌女のみ。）

學母無不爲　母を学びて為さざるは無く
曉妝隨手抹　曉妝　手に随ひて抹す
移時施朱鉛　時を移して朱鉛を施せば
狼籍畫眉闊　狼籍として画眉闊し

「北征」詩（『杜詩詳註』巻五）

この二つは杜宝が自分には娘しかいないことを歎いた箇所であり、杜甫の後裔であることを意識して我が子の様を叙した杜詩を用いている。

④第五齣「延師」【鎖南枝】（陳最良）

將耳順、望古稀、儒冠誤人霜鬢絲。（齢は六十にならんとし、古稀も遠からず、儒学に身を誤らせ、鬢には霜。）

酒債尋常行處有　酒債　尋常　行く処に有り
人生七十古來稀　人生　七十　古来稀なり

「曲江二首」詩、其二（『杜詩詳註』巻六）

杜詩は曲江にて春懐を述べたものである。陳最良は語句の典拠として杜詩を用いている。

⑤第五齣「延師」（杜宝）

則『詩經』開首便是后妃之德、四箇字兒順口、且是學生家傳、習『詩』罷。（ただ『詩経』は開巻第一に后妃の徳を称えておりまして、四字句で口調がよろしい。しかも私どもの家伝の学でもございますので、『詩経』を学

ばせましょう。）

詩是吾家事　『詩』は是れ吾が家の事
人傳世上情　人は伝ふ世上の情

「宗武生日」詩（『杜詩詳註』巻十七）

家庭教師陳最良と娘の教育について論ずる場面である。杜甫の後裔として家学の『詩経』を学ばせることを杜詩に依拠して主張している。

⑥第九齣「肅苑」【前腔（一江風）】（陳最良）

你尋常到講堂、時常向瑣窗、怕燕泥香點渦在琴書上。（常日頃、講堂に到り、書窓に向ひなば、恐らくは燕の泥もて琴書を汚さん。）

熟知茅齋絶低小　茅斎の絶（はなは）だ低小なるを熟知して
江上燕子故來頻　江上の燕子　故に来ること頻りなり
銜泥點汚琴書内　泥を銜みて点汚す　琴書の内
更接飛蟲打著人　更に飛虫を接して人を打著す

「絶句漫興九首」詩、其三（『杜詩詳註』巻九）

原詩は杜甫が浣花草堂にて春の日の感慨を詠んだものであるが、『還魂記』では陳最良が杜麗娘が杜甫の後裔であることを意識して杜詩を用いて唱ったものである。

⑦第十一齣「慈戒」（甄氏）

可憐小兒女、長自繡窗前。（憐れむべし我が娘、常に繡窓の前に在り。）
遙憐小兒女　遙に憐れむ小児女の
未解憶長安　未だ長安を憶ふを解せざるを

「月夜」詩（『杜詩詳註』巻四）

杜麗娘が杜甫の娘同様に世情を解せないでいることを母親の甄氏が哀れんだものである。ここでもやはり杜甫の後裔であることが意識され杜詩が用いられている。

⑧第十二齣「尋夢」（春香）

香飯盛來鸚鵡粒、清茶擎出鷓鴣斑。（香飯　盛り来る鸚鵡粒、清茶　擎（ささ）げ出す鷓鴣斑。）

香稻啄殘鸚鵡粒　香稻　啄み残す　鸚鵡の粒
碧梧棲老鳳凰枝　碧梧　棲み老ゆ　鳳凰の枝

「秋興八首」詩、其八（『杜詩詳註』巻十七）

杜詩は秋の感慨を詠んだものであるが、春香は春の懐いに心を傷めた杜麗娘を意識して杜詩を用いつつこの詞を詠んでいる。

⑨第十二齣「尋夢」【不是路】（春香）

何意嬋娟、小立在垂垂花樹邊。（何の意か麗しき人の、枝を垂れし梅樹の下に佇む。）
江邊一樹垂垂發　江辺の一樹　垂垂として発く
朝夕催人自白頭　朝夕　人を催して自ら白頭ならしむ

「和裴迪登蜀州東亭送客逢早梅相憶見寄」詩（『杜詩詳註』巻九）

原詩はしだれ咲く梅花を見て郷愁を掻き立てられたことを詠むが、春香はそれを花園で夢に書生と契った往日を回顧する杜麗娘の感慨に置き換えて唱っている。

⑩第十二齣「尋夢」【二犯玄令】（杜麗娘）

他趁這、他趁這春三月紅錠雨肥天。（この春の、この春の三月、梅の実の紅く綻びしは雨豊かなればなり。）
緑垂風折笋　緑は垂る　風に折るる笋
紅錠雨肥梅　紅は錠ぶ　雨に肥ゆる梅

「陪鄭廣文遊何將軍山林十首」詩、其五（『杜詩詳註』巻二）

原詩は杜甫が広文館博士鄭虔とともに何将軍の山荘に遊んで詠んだものである。杜麗娘は庭園のふとった梅実の様を杜詩に基づいて唱っている。

⑪第十二齣「尋夢」（春香）

佳人拾翠春亭遠、侍女添香午院清。（佳人　翠を拾ひて春亭遠し、侍女　香を添へて午院清し。）
佳人拾翠春相問　佳人　翠を拾ひて春に相ひ問はば
仙侶同舟晚更移　仙侶　舟を同じうして晩に更に移る

「秋興八首」詩、其八（『杜詩詳註』巻十七）

春香は秋の感慨を詠んだ杜詩に借りて、春の懐いに心を傷めた杜麗娘を意識してこの詞を詠んでいる。

⑫第十四齣「寫眞」【刷子序犯】（杜麗娘）

逍遙、怎剗盡助愁芳草、甚法兒點活心苗。（そぞろ歩き、怎で刈り尽さん愁ひ誘ふ芳草、甚にしてか我が心力づけん。）

江草日日喚愁生　江草　日日愁ひを喚びて生ず

巫峽泠泠非世情　巫峽泠泠　世情に非ず

「愁」詩（『杜詩詳註』巻十八）

杜麗娘は杜詩に言う愁いを誘う江草に掛けて自らの心を慰めようとする思いを唱っている。

⑬第二二齣「旅寄」【步步嬌】（陳最良）

背上驢兒笑、心知第五橋。（驢馬の背に在り、脚取り軽きを見、心に知る第五橋の近きを。）

不識南塘路　識らず　南塘の路

今知第五橋　今知る　第五橋

「陪鄭廣文遊何將軍山林十首」詩、其一（『杜詩詳註』巻二）

何将軍の山荘に遊んで詠んだ杜詩の詩意を離れて、家庭教師の先を求める陳最良の唱に仕立てあげている。

⑭第三三齣「秘議」（柳夢梅）

中天積翠玉臺遙、上帝高居絳節朝。遂有馮夷來擊鼓、始知秦女善吹簫。（中天の積翠　玉台遙かに、上帝の高居絳節朝す。遂に馮夷有り　来たりて鼓を撃ち、始めて知る　秦女の善く簫を吹くを。）

中天積翠玉臺遙　中天の積翠　玉台遙かに

上帝高居絳節朝　上帝の高居　絳節朝す

遂有馮夷來擊鼓　遂に馮夷有り　来たりて鼓を撃ち

始知嬴女善吹簫　始めて知る　嬴女の善く簫を吹くを

「玉臺觀二首」詩、其一（『杜詩詳註』巻十三）

杜詩は滕王の玉台観の景色を賞でたものであるが、『還魂記』では柳夢梅が梅花菴観を参拝した際の詞に置き換えている。

⑮第三九齣「如杭」【小措大】（杜麗娘）

沈醉了九重春色、便看花十里歸來。（九重の春色に酔ひしれて、花を見つつ十里の道を帰らん。）

五夜漏聲催曉箭　五夜の漏声　暁箭を催し
九重春色醉仙桃　九重の春色　仙桃醉ふ

「奉和賈至舎人早朝大明宮」詩（『杜詩詳註』巻五）

原詩は中書舎人賈至の「早朝大明宮」詩に和した作であり、ここに掲げた前半部分では早朝の朝廷の様を詠んでいる。『還魂記』では杜麗娘が柳夢梅に試験での成功を期待したものとしてこの詩句が用いられている。

⑯第四一齣「耽試」【前腔（馬蹄花）】（苗舜賓）

你釣竿兒拂綽了珊瑚、敢今番着了鰲頭。（汝は釣竿もて珊瑚樹を払はんとす、このたびこそ状元に合格せん。）
詩卷長留天地間　詩卷　長く留む　天地の間
釣竿欲拂珊瑚樹　釣竿　払はんと欲す　珊瑚の樹

「送孔巣父謝病歸游江東兼呈李白」詩（『杜詩詳註』巻一）

原詩は病気で辞職した孔巣父に杜甫が高い評価を与えたものである。『還魂記』ではこれを考官苗舜賓の柳夢梅評価に当て嵌めている。

⑰第四一齣「耽試」（老枢密）

花萼夾城通御氣、芙蓉小苑入邊愁。（花萼の夾城　御気を通じ、芙蓉の小苑　辺愁に入る。）
花萼夾城通御氣　花萼の夾城　御気を通じ
芙蓉小苑入邊愁　芙蓉の小苑　辺愁に入る

「秋興八首」詩、其六（『杜詩詳註』巻十七）

杜詩は辺境の憂患を詠んだものであり、ここではそれを金軍の入寇に流用している。

⑱第四二齣「移鎮」（駅丞）

羽檄從參贊、牙籤報驛程。（羽檄　参賛に従ひ、牙籤　駅程に報ず。）
宿槳依農事　宿槳　農事に依る
郵籤報水程　郵籤　水程に報ず

「宿青草湖」詩（『杜詩詳註』巻二二）

原詩は杜甫が宿泊した青草湖の駅館の有り様を詠んでいる。『還魂記』ではこれに借りて淮安に鎮を移す際の駅丞の詞に置き換えている。

⑲第四二齣「移鎮」【尾聲】（甄氏）

老爺也、珍重你這滿眼兵戈一腐儒。（旦那様、汝の身をばいたわれかし、眼に満つるは兵戈と一人の老儒。）

江漢思歸客　江漢　思帰の客
乾坤一腐儒　乾坤　一腐儒　「江漢」詩（『杜詩詳註』巻二三）
社稷纏妖氣　社稷　妖気を纏ひ
干戈送老儒　干戈　老儒を送る　「舟出江陵南浦奉寄鄭少尹審」詩（『杜詩詳註』巻二二）

「江漢」詩は老境にあって辺境に暮らす悲哀を、「舟出江陵南浦奉寄鄭少尹審」詩は老いて干戈に逐われる我が身を歎いた詩である。『還魂記』では甄氏が淮揚安撫使として赴任する夫杜宝の身を案じる気持ちを杜詩の詩意に借りて唱っている。

⑳第四九齣「淮泊」【皁羅袍】（柳夢梅）

［白］此中使客往來、你可也聽見「讀書破萬卷」。（中略）［唱］可笑一場閑話、破詩書萬卷、筆藥千花。（この宿には旅人が多いだろうが、万巻の書を読破したということを聞いたことがあるかね。（中略）あなおかし、このむだ話し、詩書は万巻を読破し、筆の藥に千花開くと。）

讀書破萬卷　読書　万巻を破り
下筆如有神　筆を下せば神有るが如し　「奉贈韋左丞丈二十二韻」詩（『杜詩詳註』巻一）

杜甫が青年であった頃、万巻の書を読破したという故事に借りて、年若き柳夢梅が自らの才能を誇示しようとしたものである。

㉑第五十齣「鬧宴」（杜宝）

功名富貴草頭露、骨肉團圓錦上花。（功名富貴は草頭の露、骨肉の団円は錦上の花。）

惜君只欲苦死留　君を惜しみて只だ苦死して留めんと欲す
富貴何如草頭露　富貴は草頭の露に何如　「送孔巣父謝病歸游江東兼呈李白」詩（『杜詩詳註』巻一）

原詩は孔巣父の帰郷について称賛しており、杜宝は金軍を退け帰郷のために休暇を願い出たという箇所で杜詩の

詩意に借りて、功名富貴は葉末の露と同じで、一家の団欒こそが錦上の花であることを言っているのである。

㉒第五十齣「鬧宴」【金蕉葉】（柳夢梅）

帽兒光整頓從頭、還則怕未分明的門楣認否。（帽子に光沢つけ頭より身嗜みを整へん、未だ明らかならざる娘婿は認めらるるや否や。）

妾身未分明　妾が身は未だ分明ならず

何以拜姑嫜　何を以てか姑嫜を拜せん

「新婚別」詩（『杜詩詳註』巻七）

「新婚別」詩は夫の出征により生き別れとなった新婦が自分の身分が定かではないという悲しみを詠んだものであり、柳夢梅はその詩句を借りて父親杜宝に認められぬうちは女婿としての自分の立場が定かでないことを唱っている。

㉓第五十齣「鬧宴」【前腔（梁州序）】（文武官）

看洗兵河漢、掞天高手。（武器を銀河に洗はん、天にかがやく高き手。）

安得壯士挽天河　安んぞ壯士　天河を挽きて

淨洗甲兵長不用　淨く甲兵を洗ひて長く用ひざるを得ん

「洗兵行」詩（『杜詩詳註』巻六）

原詩は天の河で武器を洗い永久に使わないようにしたいとの意であり、文武官はこれに借りて杜宝の平章軍国大事への陞任を祝うと同時に、平和を望む気持ちを唱っている。

㉔第五三齣「硬拷」【風入松慢】（柳夢梅）

無端雀角土牢中、是什麼孔雀屏風。（はしなくも誣告を受け、土牢に入れらる。なんの許婚ぞや。）

屏開金孔雀　屏は開く金孔雀

褥隱繡芙蓉　褥は隠る繡芙蓉

「李監宅二首」詩、其一（『杜詩詳註』巻一）

杜詩は李監が女婿を迎えた時の宴席の有り様を詠んだものである。柳夢梅はその詩句を女婿であるにも拘わらず杜宝に捕えられ土牢に入れられているという不条理を唱ったものに置き換えて用いている。

㉕第五三齣「硬拷」【唐多令】（杜宝）

耿秋光長劍倚崆峒。（秋光のごとく輝く長劍もて崆峒に倚らん。）
防身一長劍　防身の一長劍
將欲倚崆峒　將に崆峒に倚らんと欲す　「投贈哥舒開府翰二十韻」詩（『杜詩詳註』巻三）

開府儀同三司、河西節度使の任にある哥舒翰に贈ったこの杜甫の詩では、諸侯の幕客にならぬうち年老いてしまった自分も君のもとで活躍したいという思いが述べられている。杜宝は杜甫の後裔であることを意識しつつ、軍功により聖恩を蒙って宰相に任ぜられた自らを形容している。

㉖第五三齣「硬拷」（杜宝）

壙中還有玉魚・金椀。（墓の中にはまだ玉魚や金椀があったはずじゃ。）
昨日玉魚蒙葬地　昨日　玉魚　葬地に蒙はる
早時金碗出人間　早時　金碗　人間に出づ　「諸將五首」詩、其一（『杜詩詳註』巻十六）

杜詩は吐蕃の侵入を防ぐ将軍のことを叙すが、『還魂記』では柳夢梅を吐蕃に擬えて杜麗娘の墳墓を発いた犯人のごとく言っているのである。

㉗第五四齣「聞喜」（郭駝）

要問黿鼉窟、還過烏鵲橋。（黿鼉窟を問はんと要し、還た烏鵲橋を過ぎぬ。）
江光隱見黿鼉窟　江光　隱見す　黿鼉の窟
石勢參差烏鵲橋　石勢　參差たり　烏鵲橋　「玉臺觀二首」詩、其一（『杜詩詳註』巻十三）

原詩は滕王の玉台観に遊んだ時の作であり、観中の景色を賞でたものであるが、『還魂記』では主人の柳夢梅の行方を探し求める老僕郭駝の様の描写に置き換えている。

『還魂記』には以上のごとく杜詩を典拠として用いている。勿論、単に語句の典拠として用いられている場合もあるけれども、概ねは杜宝、杜麗娘父娘が杜甫の後裔であることを強く意識し、新たなる意味が附与されての援用である。この外、杜詩を典拠にしているわけではないけれども、やはりこの二人が杜甫の後裔であることを意識した次のような箇所もある。

○第二七齣「魂遊」［添字昭君怨］（杜麗娘）

昔日千金小姐、今日水流花謝。這淹淹惜惜杜陵花、太虧他。（昔日は千金の娘、今日は水流れ花謝る。この多情なる杜陵の花、太だ人を煩わす。）

柳夢梅のことを思い詰める杜麗娘の亡魂が梅花菴観に現われる場面である。ここでは杜甫の後裔であることを意識して自らを「杜陵の花」と言っている。

○第四二齣「移鎮」【短拍】（杜宝）

老影分飛、老影分飛、似參軍杜甫、把山妻泣向天隅。（老いたる影は分かれ飛ぶ、老いたる影は分かれ飛ぶ、参軍の杜甫に似て、山妻をば泣きて天の一隅に立たしむ。）

金軍入寇のため鎮を移す杜宝が妻甄氏と別離しなければならないことを、乾元元年（七五八）、左拾遺から華州司功参軍の任に就いた杜甫の一家離散に擬えた場面である。

○第四七齣「圍釋」（陳最良）

漢朝有箇李・杜至交、唐朝也有箇李・杜契友、因此杜安撫斗膽稱箇通家。（漢朝では李膺と杜密とが親しく交わり、唐朝でも李白と杜甫とが親密でした。これによって杜安撫は大胆にも代々の御高誼と申されたのです。）

金軍の李全に捕えられた陳最良が、李全と杜宝との高誼が代々続いていることを李膺と杜密、李白と杜甫の関係に擬えた場面である。

○第五五齣「圓駕」【北四門子】（杜麗娘）

則你箇杜杜陵慣把女孩兒嚇、那柳柳州他可也門戸風華。（杜陵の杜氏は常に娘を驚かし、柳州の柳氏の家柄もまた立派。）

柳夢梅との婚姻を認めようとしない父親杜宝に対する杜麗娘の唱であり、杜甫、柳宗元の後裔であることを意識して唱っている。

いずれにせよ同じように主人公の祖先として擬定されながら、杜詩の援用が上掲のごとく多数であるのに対して、柳詩が皆無であるのは、やはり湯顕祖の恣意的な弁別と言わざるを得ない。

## 三

『還魂記』における杜詩の多用は、湯顕祖の文学上の主張とも関連するのではないか。そこで湯顕祖が柳宗元、杜甫の文学をどのように捉えていたのかを、彼の詩文に即して考えてゆくことにしたい。

「与陸景鄴」（『玉茗堂全集』・尺牘・四）には、自らの文学遍歴を述べつつ次のように言う。

僕少くして西山の『正宗』を読み、因って好んで古文詩を為るも、未だ其の法を知らず。弱冠にして、始めて『文選』を読む。輒ち六朝の情をば声色に寄するを以て好しと為すも、亦た其の法を受くる従し無し。規模歩趨し、久しくして路に通ずること有るが若きと思ふ。年已に三十四十なり。前に数々第せざるを以て、展転頓挫し、気力已に減じ、乃ち求めて南署郎と為り、稍々二氏の書を読み、方外に従ひて遊ぶを得たり。因りて六大家の文を取りて更に之れを読むに、宋の文は則ち漢の文なり。気骨は代々降れども、而も精気は満ちて勁し。其の法を行ひて其の機に通ずるは、一なり。則ち益々好みて之れを規模歩趨し、路に益々通ずる有るが若きを思ゆ。亦た已に五十なり。道を学ぶも成る無く、而して文を為るを学ぶ。文を学ぶも成る無く、而して詩賦を学ぶ。詩賦を学ぶも成る無く、而して小詞を学ぶ。小詞を学ぶも成る無く、且に転じて道を学ばんとするも、猶ほ未だ能く情を習ふ所に忘れざるなり。彦昇托契の詠、子美同遊の思ひを思ひ顧みて、四方の大にして、必ず此の路に曠然として、其の法に精しく其の機に深き者有りと謂へり。老ゆるに及びて其の制作を窺ふを得んことを庶幾ふも、鄙質を発して未だ逮ばざる所なれば、則ち亦た以て志を満たすに足りて恨み無し。（中略）古の文賦は、秦・西漢而下、率ね足らざるを以て病み、余り有る者無し。詩は、唐の四傑・子美而外、亦た余り有る無し。其の足らざるに従りて足らしむれば、斯ち已に幾し。宗元の文を為るを論じ、子瞻の「説稼」は、裁かに其の足るを求むるを以て止む。文の質に至りては、生れながらにして已に成れり。虎豹の皮、虹霞の色は、質を犬羊霾曀に借らざること必せり。

陸景鄴は会稽の人で、名は夢龍、字を君啓と言い、景鄴はその号である。『明史』巻二四一の伝によれば、万暦

三八年（一六一〇）の進士で、官は広東按察使に至り、崇禎七年（一六三四）、流賊との交戦で戦死した。

湯顕祖の「答陸君啓孝廉山陰」詩（『玉茗堂全集』・詩・二）の序文には、この尺牘に言う内容と同じものが見え、該詩には「衰齢半百九」とあることから、万暦三六年（一六〇八）、湯顕祖五十九歳、故郷の臨川に閑居していた時に書かれたものと思われる。したがってこの尺牘も同じ頃に書かれたものであろう。

尺牘中の「取六大家文更讀之、宋文則漢文也。（中略）益好而規模歩趨之、思路益若有通焉。」とは、すでに岩城秀夫氏によって指摘されるごとく[6]、南署郎、すなわち南京太常寺博士に任ぜられて以降、当時一世を風靡した古文辞派の人びとが否定した、宋の歐陽脩、蘇洵、蘇軾、蘇轍、王安石、曾鞏の文学に親炙したことを意味している。

また「彦昇托契之詠」とは陸機「歎逝賦」（『文選』巻十六）に「託末契於後生、余將老而爲客。」とあるのを踏まえる。彦昇は任昉の字であるが、管見の及ぶ限り任昉はこのような詩句を残していない。また「子美同遊之思」とは杜甫「江上値水如海勢聊短述」詩（『杜詩詳註』巻十）の「焉得思如陶謝手、令渠述作與同遊。」による。ここでは自らも老齢の域に達した湯顕祖が、若者と心を打ち解けて交わることができない老境の任昉、老いて詩藻の枯渇を憂える杜甫に思いを馳せているのではないか。

更に「詩、唐四傑子美而外、亦無有餘。」と言うのは、初唐の四傑、盛唐の杜甫の詩に、「宗元之論爲文、子瞻之説稼、裁以求其足而止。」とは、柳宗元、蘇軾の文章に価値を認めていることを意味しており、やはり古文辞派とは一線を画していることを言明しているのである。

では、同時代、あるいは後代の人びとに湯顕祖の文学はどのように評価されていたのか。

湯顕祖の生前に書かれた鄒迪光「臨川湯先生傳[7]」（沈際飛輯『玉茗堂集選』巻首）には、彼が漢魏六朝、李白、杜甫に親炙しながらも独自の境地を拓いていることを次のように言う。

公は書に於て読まざる所無し。而も尤も漢魏の『文選』一書を攻め、巻を掩ひて誦するに至りては、隻字も訛たず。詩に於ては文の若く比擬せざる所無く、而も尤も西京・六朝・青蓮・少陵氏に精し。然るに西京を為りて西京に非ず、六朝を為りて六朝に非ず、青蓮・少陵を為りて青蓮・少陵に非ず。

また『明詩紀事』（庚籤、巻二）湯顕祖の条の陳田の按語には、詩について次のように言う。

義仍は才気兀傲にして、一世を可さず。集中の五古は、清勁沈鬱、天然孤秀たり。而るに時に蹇渋を傷むは、則ち枉がれるを矯むることの過ぐればなり。其の詩に云ふ「常に古人の先んずるを恐れ、乃ち今人と匹せん」と。又た云ふ「文家は小枝と雖も、目中誰か大手なる。何・李の色は枯薄にして、余子定めし安くにか有らん」と。李・何は法を杜に取る、義仍は則ち杜を並せて之れを薄んず。曰く「少陵の詩は一『清』字を少く」と。噎に因りて食を廢すと謂ふ可きなり。義仍は袁中郎と善く、七子を舎きて另に蹊径を闢く、趣向は則ち一なり。但、義仍は古を師とし、較々程矩有り、尚ほ能く派を別ちて孤り行く。中郎は心に師せて自ら用ふるも、勢ひ正路を舎てて荆蕪に入りて止まざるに至らず。余れ両家の得失を論ずること此の如し。一概に抹殺し、作者の苦心を没するを致すを得ざるなり。

文中の「常恐古人先、乃與今人匹」の句は、「三十七」詩（『玉茗堂全集』・詩・一）に見え、「文家雖小技、目中誰大手。何李色枯薄、餘子定安有。」の句は、「答陸君啓孝廉山陰」詩（同上・詩・二）に見える。また「少陵詩少一清字」の出処は詳らかにし得ぬが、あるいは「徐司空詩草敍」（同上・文・五）の「杜子美不能爲清、況今之人。」、「金竺山房詩序」（同上）の「誠有隴西不足爲其輕、少陵不足爲其重者。」によるのではないか。この一文は、湯顕祖が何景明や李夢陽といった古文辞派とは一線を画し[8]、彼らの敬慕した杜甫の詩に比肩して、凌駕せんばかりであったことを高く評価しているのである。

このように湯顕祖自身の文章、あるいは後人の湯顕祖評価からも、湯顕祖が文学的に柳宗元、杜甫に親炙していたことが窺われる。当然のごとく柳宗元については古文を、杜甫については詩を尊崇していたのである。

そこで柳宗元の文章が『還魂記』中にどのように受容されているのかについてみると次のごとくである。

第六齣「悵眺」は、柳夢梅が親友で韓愈の後裔に擬定される韓子才とともに嶺南にあって不遇をかこち、それぞれの祖先の作った文章を言い連ねる箇所である。

（生）你公公説道、「宗元、宗元、我和你兩人文章、三六九比勢。我有『王泥水傳』、你便有『梓人傳』。我有『毛中書傳』、你便有『郭駝子傳』。我有『祭鱷魚文』、你便有『捕蛇者説』。這也罷了。則我『進平淮西碑』、取奉取奉朝廷、你却又進箇平淮西的雅。一篇一篇、你都放俺不過。恰如今貶竄煙方、也合着一處。豈非時乎、

運乎、命乎。」韓兄、這長遠的事休提了。假如俺和你論如常、難道便應這等寒落。因何俺公公造下一篇『乞巧文』、到俺二十八代玄孫、再不曾乞得一些巧來。便是你公公立意做下『送窮文』、到老兄二十幾輩了、還不曾送的箇窮去。算來都則爲時運二字所虧。

（柳夢梅）あなたのご先祖の韓愈さまが申されました。「宗元どの、宗元どの、私とあなたの文章は、相い匹敵するものです。私が『圬者王承福伝』を書けば、あなたは『梓人伝』をお書きになる。私が『毛穎伝』を書けば、あなたは『種樹郭橐駝伝』をお書きになる。私が『祭鱷魚文』を書けば、あなたは『捕蛇者説』をお書きになる。それはそれでよいとして、私が『平淮西碑』を朝廷にたてまつると、あなたはあなたで『平淮夷雅』をたてまつられる。一篇一篇、私を放ってはおかれない。ちょうどこの度は煙方に左遷されることになって、またもや一つ処にて落ち合いました。時だ、運だ、命だということではありますまいか。」韓君、このような遠い昔の話はやめにしましょう。もし私と君が常日頃のことを論ずるならば、こんなにまで落魄するとは思われぬのですが。私の先祖が『乞巧文』を書いたのに、二十八代目の子孫になっても、わずかの幸運さえも得られませんし、君のご先祖さまが意を決して『送窮文』をお書きになったのに、二十幾代目かの君になっても、貧乏神を追い出せないでいます。推し量ってみるに、すべて時運の二字が欠けているからです。

第十二齣「尋夢」の杜麗娘が夢に見た書生を追懐する場面の次の句は、俗に柳宗元の作と言われる『龍城録』[9]所収の「趙師雄醉憩梅花下」故事を意識しているであろう。

【二犯幺令】（旦）愛煞這書陰便、再得到羅浮夢邊。

（杜麗娘）この昼間の樹陰こそいと慕はし、願はくば再び羅浮の夢境に到らんことを。

また杜麗娘の霊位が安置される梅花菴観の観主石道姑が自らの経歴を述べる第十七齣「道覡」には、

（淨）便請了箇有口齒的媒人、「信使可復」。許了箇大鼻子的女婿、「器欲難量」。

（石道姑）そこで弁舌あざやかな仲人に頼んで、私が約束に背かないことを伝えさせ、鼻の大きな好淫の婿と婚約し、私の器量を見透かされまいとしたのです。

とあり、文中の「大鼻子」は柳宗元の『河間伝』中の語句を踏まえている。

杜詩のように直截に引用されているわけではないけれども、柳宗元の作品が列挙され、あるいは語句の典拠として用いられている。

以上のごとく湯顯祖は、杜甫についてはその文学の価値を認めながらも更なる独創性を追求し、柳宗元については古文辞の人びとが顧みようとしなかった唐宋八大家の一人として評価しているのである。『還魂記』において柳詩が全く用いられていないのは、一つには杜詩と柳詩の質と量の差によるであろうけれども、では柳宗元の文章は間接的に、杜甫の詩は直截にという受容形態の差異は何に起因するのか。これは恐らく後裔に擬定された柳夢梅と杜宝、杜麗娘父娘の作品中における役割の相違にも関連しているであろう。

## 四

ところで元明の戯曲において杜甫はどのように受容されてきたのか。歴代の戯曲中に杜甫が主人公として登場するものには范康『曲江池杜甫遊春』（『録鬼簿』著録）、沈采『四節記』中の『曲江記』（『曲海総目提要』巻十七著録）、王九思『沽酒遊春』（『古今名劇酔江集』所収）、許潮『午日吟』（『盛明雑劇二集』所収）などがある。この中でとりわけ杜甫の詩句を多く典拠として用いる『午日吟』は次のように評価されている。

中間の詞曲の点染せし処、多く子美詩の字句を用ひて而して以て才情を見はす。賓白中の詩篇も亦た多く杜集に出づ。

（『曲海総目提要』巻七）

黄嘉恵云ふ「……『午日吟』の賓白は純ら詩句を用ひ、之れを関すること一たび過ぐれば、『少陵集』を読むに勝れり……」と。

（姚燮『今楽考証』三「明雑劇」）

以上の戯曲は、いずれも杜甫本人の事跡、あるいは杜甫の詩句に基づいて作られており、現存する『沽酒遊春』、『午日吟』における杜詩の援用はいわば当然のことである。これらとは異なり杜甫が直截登場しないにもかかわらず杜詩を多く用いた戯曲としては、邵文明の『重校五倫伝香囊記』を挙げることができる。この戯曲は宋の張九成夫妻の悲歓離合を演じており、戯曲史上においては駢綺派の端を開いた作品として重要な位置を占める作品である。[10]

また一方では『琵琶記』や『拝月亭』を踏襲した箇所が多いとしてしばしば非難された戯曲でもある。この戯曲における杜詩の多用は、次のように後人に厳しく非難されている。

時文を以て南曲を為るは、元末国初に未だ有らざるなり。其の弊『香囊記』に起こる。『香囊』は乃ち宜興の老生員邵文明の作、『詩経』を習ひ、専ら杜詩を学び、遂に二書の語句を以て曲中に匂入し、賓白も亦た是れ文語なり。又た好んで故事を用ひ対子を作し、最も事を害すと為す。（中略）経子の談は、之れを以て詩を為るも且つ不可なり、況んや此等をや。（徐渭『南詞叙録』）

『香囊』は詩語を以て曲を作り、処処煙花風柳の如し。「花辺柳辺」（第六齣【朝元歌曲】）、「黄昏古駅」（第二十九齣【集賢賓】）、「残星破暝」（第三十五齣【甘州唱】）、「紅入仙桃」（第二齣【錦堂月】）等の大套の如きは、麗語藻句、眼を刺し魄を奪ふ。然れども愈々藻麗にして、愈々本色に遠ざかれり。（徐復祚『曲論』）

そこで『香囊記』の杜詩援用の例を挙げれば次のごときものがある。[11] 第二齣（『六十種曲』所収本は「慶寿」と題すが、「継志斎本」には無し。以下同様。）は張九成が母親崔氏の長寿を賀す場面である。

【錦堂月】（生）紅入仙桃、青歸御柳、鶯啼上林春早。簾捲東風羅襟曉寒猶峭。喜仙姑書附青鸞、念慈母恩同烏鳥。

冒頭の「紅入仙桃、青歸御柳」は「奉酬李都督表丈早春作」詩（『杜詩詳註』巻九）の中の「紅入桃花嫩、青歸柳葉新。」を踏まえている。

また張九成が母親の勧めにしたがい、弟九思とともに会試受験に赴く途中、同道の友人達と酣飲する第八齣（「投宿」）には次のような唱がある。

【排歌】（淨）内苑糟丘、中山醴泉、須教渇吻流涎。相逢拚取杖頭錢、一斗休論價十千。（合）金蘭嫩、玉蕤鮮、長安市上酒家眠。清如聖、濁似賢、玉樓人醉杏花天。

この唱の中で「長安市上酒家眠」の一句は「飲中八仙歌」（『杜詩詳註』巻二）の「長安市上酒家眠、天子呼來不上船。」をそのまま用いたものである。

『香嚢記』の評価に関して言えば、徐渭、徐復祚が典拠を多く用いた戯曲に酷評を下しているのは、ともに本色を重んずる作者であったからである。しかしながら『香嚢記』における杜詩は、作者と杜甫、登場人物と杜甫との関連によるものではなく、あくまでも語句の典拠としての援用であり、『還魂記』の場合とは全く別趣である。

ともあれ湯顕祖が杜詩を積極的に『還魂記』中に取り入れた理由の一つは、言うまでもなく杜宝、杜麗娘を杜甫の後裔に擬定したため、杜甫の後裔らしく描出する必要があったからである。集句詩の場合は白や唱に関わる人物と作品の内容との間に直截の関係はないけれども、典拠詩の場合は意味に軽重の差こそあれ、杜甫の後裔であることを意識しているものが大部分である。しかしながら単に杜甫の後裔らしく描き出すために杜詩を多用したのではないことは、同じく主人公の祖先に擬定しながら、柳詩を典拠として全く用いていないことからも明白である。

杜詩と柳詩の援用の有無は、おそらく前節において述べた湯顕祖の文学上の主張と関連しているであろう。湯顕祖は公安派の先蹤を做す人物であって、当時盛行した古文辞派には強い反撥を示した[12]。すなわち、秦漢の散文や盛唐の詩の無批判な模倣ではなく、唐宋の古文家たちの文学に価値を認めようとし、杜甫に親炙しながらも独自の境地を切り拓いたのである。だとすれば、詩句の援用の有無は主人公の祖先に擬定した柳宗元であれば古文家として、杜甫であれば詩人として評価した湯顕祖の文学上の好尚が大きく左右しているであろう。

更に柳夢梅、杜麗娘の作品中における役割の比重も詩句援用の有無に関連しているのではないか。柳宗元、杜甫の後裔という設定は、もとより藍本の「杜麗娘記[13]」には見えないものである。湯顕祖はともに唐人の子孫としながらも柳夢梅、杜麗娘の役割にそれぞれ別の意味を附与していると考えられる。すなわち前稿において述べたように[14]、湯顕祖は自らを政治的確執から嶺南に流謫されたという共通点をもつ柳宗元と同一視し、その後裔に擬定した柳夢梅に作品中において苦境を脱して栄達させ、自らの理想像のごとく描き出している。このように柳夢梅には自らの理想像として形象化することに重きを置いていた一方で、杜甫には作者の『還魂記』執筆当時の境遇を背景にした特別の附託はない。むしろ柳宗元に自らの境遇を同定したことに対して均分の比重を与えるべく杜詩を多用したのであろう。これは柳宗元の文学の援用が極めて間接的であることからも窺測できる。つまり柳夢梅には柳宗元の文学を受容することによってその後裔らしく描出することよりも、流謫の悲哀を超克するという作者自らの現実に即

した重要な意味が与えられているのである。一方、杜宝、杜麗娘父娘についてはいかにも杜甫の後裔らしく描き出すという戯曲としての効果を考慮して杜詩が多用されているのである。

以上を要するに、『還魂記』における杜詩の受容は、杜甫といえば詩、柳宗元といえば古文という旧来の価値規準に則ったものではなく、主人公の作品中での役割を加味しながら、古文辞派のごとき規範としての杜甫祖述ではなく、杜詩に学びながら新たなる境地を切り拓いた湯顕祖の文学理念を表徴しているのである。

## 注

(1)湯顕祖の徐聞流謫の経緯については、八木沢元氏『明代劇作家研究』（講談社、一九五九）四二八、四九二頁、岩城秀夫氏『中国戯曲演劇研究』（創文社、一九七三）七二頁～八九頁に詳述されている。

(2)「『還魂記』における柳夢梅像の設定」（『日本中国学会報』第四一集、一九八九）。

(3)本稿では明版と思われる天理図書館所蔵の臧懋循刪訂『還魂記』を用いた。

(4)第一齣「標目」の下場詩は、湯顕祖の創作にかかるものであり集唐詩ではない。また第五五齣「圓駕」の下場詩は、七言絶句の集唐詩二首より成る。尚、第十六齣「詰病」の下場詩は、康熙三三年（一六九四）、陳同・談則・銭宜の三人の手に成る『呉呉山三婦合評牡丹亭還魂記』、及び光緒三三年（一九〇七）、劉世珩の校刻にかかる「暖紅室彙刻傳劇」所収『玉茗堂還魂記』にのみ見られるものであるため、ここでは算入しなかった。

(5)ここに掲げた典拠は、既に徐朔方・楊笑梅氏校注『牡丹亭』（人民文学出版社、一九八二）に指摘されるものである。尚、本稿における『還魂記』の引用は、京都大学文学部、及び大阪府立図書館所蔵の「懐徳堂本」を用いた。

(6)「詩文における湯顕祖の主張」（『山口大学文学会誌』十八―一、一九六七）、また前掲注(1)『中国戯曲演劇研究』四六頁。

(7)この伝が湯顕祖の生前に書かれたことは、湯顕祖自らが「鄒愚公未有半面、而以所聞爲傳以寄、感勒良深、奉

覽。」（「答湯霍林」、『玉茗堂全集』・尺牘・二）と言うところから知ることができる。

(8)古文辞派については鈴木虎雄氏『支那詩論史』（弘文堂書房、一九二五）、吉川幸次郎氏『元明詩概説』（「中国詩人選集二集」、岩波書店、一九六三）に概説されている。また李夢陽については吉川氏「李夢陽の一側面――古文辞派の庶民性――」（『吉川幸次郎全集』第十五巻、筑摩書房、一九七四）に、何景明については入矢義高氏「擬古主義の陰翳」（『明代詩文』、筑摩書房、一九七八）に論考がある。但、何景明については「明月篇序」（『何大復集』巻十四）に杜詩批判を残しており、必ずしも李何と並称して図式的に同格と見做せないことが、入矢氏に指摘される。

(9)『龍城録』の作者については、柳宗元の撰であるとの説もあるが、実は宋の何薳『春渚紀聞』巻五「古書託名」の条に王銍の偽作と言うごとくであろう。尚、作者についての詳細は、Hans H. FRANKEL 氏 "The Date and Authorship of the Lung-ch'eng lu" (Silver Jubilee Volume of the Zinbun-Kagaku-Kenkyusho, Kyoto University, 1954) に論考がある。

(10)青木正児氏『支那近世戯曲史』（『青木正児全集』第三巻、春秋社、一九七二）一〇二頁。また『香嚢記』については、趙景深氏に「読『香嚢記』」（『中国戯曲初考』、中州書画社、一九八三）なる一文がある。

(11)本稿では『古本戯曲叢刊初集』所収の「継志斎本」を用いた。

(12)前掲注(6)岩城氏論考参照。

(13)岩城秀夫氏「還魂記の藍本」（『吉川博士退休記念中国文学論集』、筑摩書房、一九六八）、また前掲注(1)『中国戯曲演劇研究』二一五頁～二三〇頁に指摘される。

(14)前掲注(2)拙稿参照。